幼児後期および学童期の子どもの強みを引き出す看護実践プログラムの開発

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2018-03-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 古屋, 千晶
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2003352

論文内容の要約

学 生 番 号	3214008
氏　　名	古屋 千晶

主　査	髙橋 眞理
副　査	青木 きよ子
副　査	伊藤 龍子

学 位 論 文 名	幼児後期および学童期の子どもの強みを引き出す看護実践プログラムの開発
訳 タ イ ト ル	Development of nursing practice program that bring out the strengths of preschool and school-age children
共　著　者	

【研究目的】

本研究の目的は、入院治療中の子どもの強みを引き出す看護実践プログラムを開発することである。

【研究方法】

1. **研究デザイン**

研究デザインは、プログラム介入群による準実験研究とした。

2. **研究方法**

研究方法は、子どもの強みを引き出す看護実践プログラム(以下、看護実践プログラム)による介入前後で子どもおよび保護者に質問紙調査を行った。また、看護実践プログラム介入中の子どもおよび保護者を観察し反応とその様子を記述した。

3. **対象者**

対象者は、入院している5歳から9歳までの承認および同意の得られた子どもとその保護者とした。

4. **看護実践プログラムによる介入**

本研究の看護実践プログラムは、4セッションで構成した。子どもの強みを引き出すために、Paul Stallardの「考え」、「気持ち」、「行動」のつながりを探求する認知行動療法を参考に3セッションを作成し、最後のセッションはValues in Action Inventory of Strengths :VIA-ISの強みの認知的な行動尺度である24項目の質問を用いて介入した。

5. **分析方法**

量的データである自尊感情尺度および子どもの強みに関する質問紙は、Friedman検定およびWilcoxonの順位和検定による統計を行い、看護実践プログラム介入前後における子どもの自尊感情および子どもの強みの行動の変化を分析した。質的データである看護実践プログラム中の子どもおよび保護者の反応とその様子の記述は、質的帰納的に分析した。

6. **倫理的配慮**

本研究は、研究者の所属する大学院の倫理審査委員会および研究施設である病院の臨床研究倫理審査員会の承認を得て実施した。

【結果】

本研究の対象者は14名の子どもとその母親であった。年齢は、5歳から9歳であり平均年齢は6.7歳であった。そのうち、幼児後期の子どもは3名、学童期の子どもは11名であった。看護実践プログラム介入前後の子どもの自尊感情の有意な変化は認められなかった。また、母親による子どもの強みの行動評価においても変化は認められなかった。しかし、本研究の看護実践プログラムによる介入により、対象者全ての子どもが自身の強みを表出することができた。子どもの強みの例として、＜人の話をよく聞けるところ＞、＜自分の気持ちを人に伝えることができること＞、＜正直なところ＞などであった。

【考察】

入院生活や治療による苦痛を抱えていたとしても子どもは、強みを活用して乗り越え入院生活においても豊かに生活を送ることが望まれる。そのために、本研究で開発した看護実践プログラムにより看護師は、子ども自身が強みを発見し自覚できるよう関わることが重要であり、子どもの持つ力を引き出してその強みを支えることが看護援助として十分提供できると考察する。また、子どもが困難な状況である入院生活において、子ども自身が強みを発見し、それを自覚することで前向きな生活を送ることができるのではないかと考える。

【結論】

本研究で開発した看護実践プログラムによる介入は、子ども自身が強みを発見し表出することができた。今後は、本プログラムの完成度を高め介入効果を検証し、臨床に還元することが課題である。